

令和5年度金山町景観フォーラム（議事録）

●日 時：令和6年3月19日（火）18：30～20：10

●内 容：別紙次第

●参加者：別添名簿

○講話（講師：秋田公立美術大学大学院 教授 岸 健太 氏）

本日のテーマに沿って、私の思うところ等について話をしてみたいと思う。まずは前段として、これは金山の皆さん、特に若い世代で、街並みづくりという言葉が金山でよく使われていると思いますが、どんなことなのかと簡単な理解をしていた方がいいと思うのでお話しします。

街並み景観づくり100年運動が、大体40年を過ぎたくらい続いてきている。最初は全町美化運動といって、建物に限らず、街の環境を上手につくっていくという運動から始まった。いくつかポイントはあるが、まず100年運動という言葉がある。運動が始まった時の、私の上の世代の先輩建築家の方々に話をお聞きしたところ、「景観100年政策ではなく運動にした。運動という言葉に実はすごい大きい意味がある。」という話をされていた。政策にしてしまうと、本当に行政、一部の建築家、街づくりの専門家たちだけで推進していくようになってしまう。そうではなく、運動という言葉を使い続ける必要として、皆さんが当事者で、私たち自身で推進する必要があるんだということ。運動だと固く聞こえて、活動家のように感じるかもしれないが、そこまでいくものでもなく、昔に立ち返ってみると、少し大きめの町内会運動、町内会活動みたいな、私たちが暮らしている場所を良くしましょうということを、町民たちが前に進めるものです。それを100年かけて、次世代にバトンを渡していく仕組みを作ろうと考えたのが、このネーミングになります。なので、100年政策ではなくて、100年運動にしていく。その部分のポイントは、金山はかなり独特で特殊な街づくりをしている。私も日本のいろんな自治体の街並み作りを見てきてますが、最初から町民に、いずれバトンを渡してみんなが走ってくという理念で、作られた街並み作りはほぼないです。その部分は非常にユニークであり、街の外からも様々な形で評価を受けている。

もう一つ、初めの40年間は、昭和に入って、高度成長期があって、みんながお金を持っていて、いろんな形で自分の夢を叶えるために、お金を使い住宅を建てたり、色々な事が出来る時代になっていて、いろんな姿に街も変わり始めた。強制的ではなく、皆さんも納得できる形で建物、街並み、公共物を含めて、上手に整備をしていく段取りを、こういうふうにつくっていくんですよ。そのためには公共事業として、金山小学校や町役場、きごころ橋、マルコの蔵の再整備だとかそういったものを、地元の材料を使い、地元の色を上手に引き出していきながらやっていくと、だんだん整っていくという、道筋作りを先輩である専門家の先生方がしてくださった。その段階が最初の40年間となる。そういうことが上手に進んできて、それもまた外部で高い評価を頂いて、金山町の

街づくりは全国的な表彰も頂いている。そういう形で、非常にレベルが高い街づくりをやっている町だということが評価された。これは金山だけでなく日本全国ですが、その専門家たちが先導して、ハードづくりで、建物や建造物等の整備をしていくことに、ずっとお金を使い続けると、日本の経済が弱くなる状況になる。そういった中で、今までと同じような形でハード整備による街並みづくり、整備ができない状況であるが、金山は既にここまでの下地ができている。

いよいよそこから皆さんと共有し、街並みづくり 100 年運動の第 2 ステージというものを始めましたが、同時にコロナが始まってしまった。アクションプログラムで街並みづくりを皆さんと対面でいろんなアイデアを出し合って、前に進めていく団体がしばらく停滞しておりましたが、この景観フォーラムが開催され、活動に向け少しずつ復活をし始め、この 100 年運動にふさわしい、例えば、建物づくりに代わり、人づくり、文化づくりだとか、形に残るようなものではなく、むしろ、受け継がれることでしか残らないような、そういったものを、景観を、キーワードに作っていくという段階に入ってきているのが街並み景観づくり 100 年運動の今の段階という感じになる。今まで、こういうことをやってきたから、それにならば、これをやってくれという話では全然なく、既に準備が整った状態で、運動として、景観とか、街並みというものを私たち自身が、生活だとか、人生とかに取り組んで、引き寄せたときに、何ができるのかということ、どんどん提案し始める段階に来ていると考えていただけたらいいと思う。

先ほど「人づくり」と言葉で使ったが、景観づくりというと、景観のために、いい景観を作るために、何か私たちは奉仕しなければいけないという感じで、一方通行な感じがすると思うが、次の段階から、そうでなくてもいいと思う。むしろ、景観が整うことで例えば、子育て世代の方々が本日参加されていて、景観に大人たちが関わって一生懸命、自分ごととして作っていく姿を子供たちが見ることで、それ自体が、子供たちの文化の勉強になり、暮らし方や街はこうなんだ、近隣の関わりってこうなんだ、社会ってこうなのかなとか。あるいは、自分たちが生まれ育ったふるさと、文化はこうなのかと、直接勉強できる機会になる。教科書を読むとかではなく、教材として景観を使ってよいと思う。それがまた、景観を育てることに繋がっていくため、景観のためになんとかするのではなく、景観を作りながら、自分たち自身、あるいは子どもたち、次の担い手自身も学びながら育てていく。次の世代も自分ごととして思いながら、その街を引き受けるという形で、バトンを渡していけるように、これから始めていくためには、どういう仕組みが必要かというのが、このテーマの「持続可能な」という部分だと思う。

「持続可能」とは、いろんな形で出来ると思う。お金がたくさんあるから持続可能であるという考え方もあります。しかし、もう次の段階、先ほど経済の話をしたが、お金が無いけど出来ることがまだたくさんあると思う。そのヒントは、皆さんの中に眠っているか、隠されていることだと思います。私自身も人前でお話すると緊張もする。今回は台本なしでやっていますが、本当に自分自身の言葉で話しをした方が、自分の言葉

で、景観のこれからをどうするかということを見つけ出しながらの方が楽だと思います。そういった意味でも、肩の力を抜いてやっていきたいと思う。

もう一つは、次のテーマですが、これは住み手の当事者、金山の気候、文化とか、もちろん運動を始めた頃とは違う、日常の生活サイクルもあると思う。当時は車もそんなに活用されていなし、テレビも一家に一台なかったかもしれない。あるいは職場の場所も、通勤の考え方で違ったかもしれない。そういった意味でも、今はどうなのかということに立ちながら考えていきたい。ただ、金山町の建築の文化というのがあります。金山杉があり、金山大工がいる。もう一つ、経済に対して考えてみると、自前の経済、小さい自分たちの町があるというんですかね。その中で上手に回る経済みたいところで、大昔として、そこでは家も建てられ、家が建てられれば近隣のみんなでお祝いして、そこで住む人がそこで自分の感性を育て、ふるさとだなと思うというようなサイクルがあったと思う。だけど今は、いろいろなものが広い範囲で流通している時代です。その中で経済の話をする、外側の経済というのがあります。そういうものに対して、上手に接していかないと、大きく転ぶ可能性もあると考えている。例ですが、鉄道を通して駅ができ、人がたくさん来る。人の出入りが増え、当時賑わった駅前ところが、惨憺たる状態になっている。人の数が減り、交通のあり方が変わっていった時に、外側に頼った経済は、いかに一発で、その街を壊滅的な状態に落とし込むか。そういう落とし穴はたくさんあると思う。例えばインバウンド、観光がありますが、上手にお付き合いしないと危ない。例えばコロナが起きて、インバウンドがなくなった当時の京都の状態は、悲惨極まりない状態でした。建設中のホテルが途中で全て中止になった。今もそうですが、京都府で一生懸命インバウンドが戻ったとあって、観光誘致を頑張っているが、逆に京都の街並みを強調しすぎて、ほぼテーマパークみたいな状態になっている。だから元々京都にお住まいの方は、こんなの京都じゃないと言っている。あれだけ歴史がある街でも、あまりにも外側の経済に頼りすぎることによって、自分たちの街を失うことになる。だからそういうことにならないように気をつける必要がある。金山の場合、住みたい建たい住宅のための、さまざまな準備、素材も材料も職人の技もある。そこを上手に取り入れながら、外側とも上手に付き合う。そういう感性を、街並みづくりのことを考えながら、自分たちのものにしていきたいという感じだと思います。

○ディスカッション

(ファシリテーター：秋田公立美術大学大学院 教授 岸 健太 氏)

テーマ①「これからも持続可能な街並み景観100年運動について」

<岸先生>

どんなところからでも構いません。一つ一つの言葉を抜き取って、この辺、割とこういう話ができそうとか、こういうところが分からないですとか。私に答えられないこともあると思うので、それは皆さんから、こういうことじゃないかとか、こういう捉え方もあるみたいな形でお話しいただければと思います。

<栗田伸一>

中田地区在住の栗田です。ハード面からスタートして、次のステップ準備に入っているということだったので、次はソフト面ということで、当事者意識とか、そういったところをぜひ植え付けていきたいなと思ったところです。様々な場面で今、自分の中でも当事者意識というのがすごくテーマになっている。こういった街並みの話でも、そういったところから話を広げていってもらえれば良いなと思う。

<岸先生>

当事者意識や自分ごととか、そんなふうに考えてもいいと思う。当事者意識をどうやって沸かすのかという話もあるかもしれないし、実際のところそうだと思います。現在、私たち自身が当事者意識を持ったり、当事者意識を沸かせようと始めた世代かもしれない。では、子どもたちの世代が当事者意識を持つためには、どんなことをしてくれるのかとか、なんかそんな感じの間も浮かびます。例えば、金山では町内会、青年会、婦人会、消防団といった、いわゆる地区の活動は活発に動かれているんですか？

<栗田伸一>

私も子育て世代ですが、町内会のところでいくと、そろそろ役職を持ち、地域の中核にもあたる。ただ、その次がないという年頃でもある。自分たちが最後の砦としてやっていかないといけないというものすごい場所だと思っているので、当事者意識がすごくある。その次がないという世代に対して、当事者意識、地区のことを、持ってもらえているのかなとすごく疑問もある。

あと、当時は街並み景観のモデルはドイツとお伺いしたことがあります。私はなぜドイツはあれだけ立派な景観になって、当事者意識がいつまでも続くのかというのもあり、そのお話も聞きたい。

<岸先生>

ドイツの町の形そのものをモデルにしたというよりも、ドイツの街並み、そこに住まれている方を含めて、景観を非常に誇りにして大事にしているということで、ドイツ研修を行っていた時期もあったということです。先ほど紹介した先生方の中で、ドイツの町の研究とかを街づくりを専門で研究していた方がいた。ドイツの町並みそのものをモデルに、ハード面で整備しようとやってしまうと、湯沢市でドイツを模したような街がありました。形とか外側だけをドイツに模してありますが、それは確かにお金を使えば同じようなものに整備はされるが、そこに住む人たちが本当に大事だと思っているか、必要だと思うのかという部分が、抜け落ちている感じがしました。なので、金山のドイツ研修では形を見るだけではなく、そこで生活している方が、どんなふうにその街の中で生活していて、振る舞い、楽しそうに幸せそうにしているのか、そういうことを見てきたらいいのではという、素朴な視点感を研修でドイツの場所をモデルにしたと思われ

ている。もちろん金山とドイツの建築も似ているが、外側だけではなくて中身を見てくる。

でも実際はどうしたらいいのか。当事者意識みたいなもの、自分ごととして、そういう街並みを続けられる。面白いなと思います。これは本当にいろんな説があるのかもしれないんですが、当事者意識を持って、そこに巻き込まれてた方が、生き物として生き延びる可能性が高いんじゃないかと。もしかしたらそういうのもあるかもしれない。一人で孤立して、周りバラバラで生きていくことよりも、何かをきっかけにして、みんな繋がっていた方が、生きていきやすいのではないかと。困った時に助けてもらえるとか、いい社会を作れるんじゃないかと。たまたまドイツが、建物景観というものを手がかりにして、みんなが集まる原理というものを作ったのかもしれない。もしかしたら違う町は違うことを手がかりにして、大きいお祭りとか、1年に1回しかないリオのカーニバルみたいな、そういうことに向かっていく。そこに巻き込まれていくことによって、生きていくことがすごく楽にとか、安心できるとか、そういうことなのかもしれないというふうに私は思う。

そういう意味でも、当事者意識とは、割と人間の本能に近い、利己的な部分なのかなと。社会をつくっておけばいいぞ、食いつ端くれないぞとか、病気になったら誰か助けてくれるぞとか、そういうことなのかもしれないと思ってもいいのかなと少し思う。他の見方もたくさんあると思うが、やっぱり少しずつみんなに参加して、きちんとしていかないと、人間はだらしないものだから、どんどん退化するとか、そういう説もあるかもしれない。僕も専門家ではないので、その分野は詳しくはないです。逆に当事者意識が重くて苦しい、そういうのもあるかもしれない。当然そういう考え方もあると思う。それぐらい私たちは、一人でいろんな好きな事やってもいいし、与えられて、選択もできる時代に生きていて、逆にみんなと一緒にいることによって、息苦しさを感じる事だってあるかもしれない。なので、そのバランスをどうとって、日本の社会や地方の町が、どのように生きていくか、それが生き方の問題かもしれないが、でも楽しく楽に生きた方がいい社会かなと思うので、そのために景観というものをどう使えるか、先ほど景観のためにではなくて、むしろ子どもたちの教科書になったらいいかなというように、景観をうまく利用した方が景観が良くなっていくのかなと話しましたがどうでしょうか？

<阿部実行委員長>

景観を教材として利用し、景観を学び、育てていくという話が出ましたが、金山中学校の総合学習「金山学」で、1年生から金山を学ぶ授業がある。今年の1年生が質問した内容を資料でお渡ししている。拝見すると金山杉や空き家の問題、町の景観についての質問があり、すごく考えてくれているなと思う。これを見ると金山の景観を教材にして学んで、先ほど先生がお話した、暮らし方、街づくり、文化をすごく考えてくれている町なんだと感じる。

<岸先生>

子どもたちも、様々なものを見ているかもしれない。景観100年運動と言われるが、どこから入れればいいんだとか。街並みと書いてあるが、有屋の方に住んでいるから、街並みみたいなものはないとか。実は私の本籍まだ有屋です。実は父親の代は金山で生まれていて、子どもの頃は、春、夏、冬休みは里帰りして金山を訪れていた。私にとっての金山の街並みは、目で見た眺めではない。なんとなく金山の中心辺りを歩いていると、古い家の木の香りが流れてくるイメージがある。ここは古いものがずっと落ち着いてあるみたいな。個人的な感覚が自分にとっての街並み、景観だったりするし、建物として見えてるものだけではなく、雰囲気だとか、暮らす方々の個性だとか、そういったものも街並みの中に含まれていると思う。そういったことを広げて考えていただけるといいかなと思う。

<星川康明>

金山学の資料を拝見して、私も20年前に、金山学で金山町の街並みづくりを学んだはずでしたが、20年も経つと忘れていたことも多く、景観フォーラムに参加するにあたり、街並み景観づくりについて少し調べてきた。もう一度調べてみると、昔の先輩の方々が築いてきた街並み景観の重みを感じます。あらためて街並みを見ると、すごく綺麗な街だと実感する。こうやって知るということは当事者意識を持つことにつながるのではないかと思った。

<岸先生>

知っていくうちに、自分のことのように覚えてくることは、確かにあること。子どもたちに向けての金山学ありますが、大人向けの金山学があっても面白いと思う。今、アイデアをご提案いただきましたが、当事者意識を高める、集めるには、どんな方法があると思いますか？

<沼澤議員>

私もドイツ研修に参加した。そこで感激したのは、ドイツに行くと窓際にいっぱい花が飾れている。それが一個だけではない。だから客観的に見るととても綺麗。おばあちゃんが水やりをしていたので毎日の水やりは大変ではないかと聞いた。ここが大事なところで、そのおばあちゃんは、「何も苦労なんて考えない。これが私の暮らしなんです。」とお話をしていた。先ほど先生が言った、今は景観政策の第2ステージだと。第1ステージも非常に形として、金山住宅やハード面の整備を行ってきたが、ドイツのおばあちゃんが言ったような、心豊かなような感じのものではないです。そこら辺をどうやったらいいかということが、これからの課題ではないかと私は思っている。

もう一つ、私は70歳を越えました。40代の頃は金山で様々なイベントがあった。レイドカムロ、田楽金山とか、いろんなことをやっていた。農家民泊をさせたイベントをや

りました。民泊した家におじゃまして、夜にお酒を飲む。その際、役場のある人は私にこんなことをお話しした。「お前らのやっていることは、ホームステイで農家に泊めるということ。この行動は、何の計算もなく町民教育をしている。」と。当時ホームステイを受け入れている家に行くと、この町は綺麗だとか、この場所は少し普通の場所と違う、今で言う昭和みたいな、そういう感じだということ、その各家々の酒飲みの場で話をしている。これが町民教育だと、役場の職員は私に教えてくれた。そこで思ったのは、いくら金山住宅で整備したとしても、日常的に生活している私たちは、そこに綺麗だとかは感じない。しかし、外の人から言われると、違う視点もありやっぱり気づかされる。これからもこの街並み景観 100 年運動を継続するには、私が考えるのは、一つはソフト面で、つまりこれが豊かな暮らし、私の暮らしだと。人が来るから見せるためにしてるわけではない。自分が楽しむため、これが私の暮らしなんだと。こういう視点が一つ。

もう一つは客観性という外の意見で、あなたの街は綺麗ですとか、そんなことを言われるような仕組みを作る。つまり今でいうと関係人口を増やして、都会の人が金山に来て交流する。この関係をさらに広めないと、絶対に私は、この景観を自分たちで、この街を綺麗とは、日常的には誰も言わないと思う。その辺を今後、この町の街並み景観運動を運動論として進めるには、私は大きくはこの二つだと思っている。ここに気づいて、今までのやり方を少し変更して何が必要かと。どういう手段を用いるかということ、これからやっぱり考えないといけないんじゃないかと思う。特に、もう一度ドイツの話に戻ると、ドイツは確かに綺麗で、昔の土蔵の家でやってる。中に行くと全く近代的な生活様式をしている。その全体像は、行政がしっかり仕組みを作ってる。これ以上高いものは建ててダメだとか、そういう規制を設けて、全体が仕組みになっている。あとは、これは個人の問題だから、外側はそうにしても、中は自由に住みやすいようにしなさいよと。そんなことで、先生の言う第 2 ステージについて何をすればいいのかを、もう少し色々話した方がいいと思います。

<岸先生>

先ほど街の中で、内側で、どんなふうにもいろいろなものが回っていくか、そこを充実させよう、また、外側の世界とのお付き合いも大事だと話しましたが、あんまり怯えすぎではなく、むしろ関係人口をしっかりと作っていきながら、人口を作るというよりも関係を作っていきながら、外側がこちらをどう見て、こちらは外側に対して何を伝えたいのかということ、これを自覚していくことが、むしろ当事者意識を、確認するために大事な手がかりじゃないかとお話をいただいたと思います。それはその通りだと思う。あとドイツの行政も、しっかり基準を作っていた話がありましたが、金山町でも条例がしっかりあります。そういったものもこれからどんなふうにも位置づけて、上手に活用していくのかは岐路に立たされていると思う。なので今まで上手に守れてきた部分は、上手に

守りながら、先ほど生活の内側では非常に近代的だと話をされていたが、そういう使い分けのようなものも、これから我々には必要と思う。

<栗田伸一>

今の沼澤さんのお話聞いて、すごくいいお話を伺ったと思う。今、これからその形を目指さなきゃいけないという、今現在はできてないということで、私もなんとなく言い換えさせてもらいます。

私と姉が第一次ベビーブームみたいな感じで、教育方針としては、地域ぐるみで仕事のあるところに出ていけという指導、教育を受けて、ほぼ仲間は関東圏の方に行きましたという教育を受けてましたので、正直、その洗脳はまだ取れてない。先ほどドイツのおばあさんのような、豊かさと言われると、どれだけお金を持ってるか、どれだけ豪華なお家に住んでるかというのが、どうしても抜けきれていないのが一つ。

あと、内側の面で、子供に声がけするとき、なるべく否定的な言葉を使わないようにしている。例えば「金山町って」。とはいえ、どこかで言葉の端々に出ているのを気にしている。テレビで米沢の上杉鷹山の話振ったときに、小学生が次から次へと上杉養山の話をする。それは学校で勉強してるからだ。体育館にも肖像画が飾られたりする。おそらく今もされてはいるが、学校の教育の中で年に何回か街並み景観の話するのはすごく影響があると思った。そういう政策もすごく面白そうだと、そのテレビを見てて思ったのが、内側の面です。

もう一つ、外側から来たときに評価されるという話も、人伝えでは聞くことはありますが、今日もし、金山住宅等にお住まいで、尚且つ、そんな話題を触れて、少し気分が高揚したとか、この街に住んでよかったなとか、この家建ててよかったなとか、生の声があると、確信を持って広められると思いますが、今のところ、人伝えにしか聞いてないので、金山住宅は本当に素敵なのかというところもある。もし今日そんな方が参加されていたらお伺いしたいなと思いました。

<杉井範之>

私は生まれ育ちが北海道です。単身赴任でイタリアやデンマークを何回か行きました。本拠地としては群馬県沼田市、高崎市です。八王子にも家を建てて住んでいたことがある。群馬県沼田市で事業が拡大して、どうしてもそこに居を構える必要があった。上棟式を終えて事業の関係で金山町に来た。金山に来てびっくりしたのが、自然が美しく、家並みが揃っていて、高さが一定。自然を共有財産として、みんながそれを守っていこうという意識。その40年前に私が来たその当時、役場、農協、町民の方々に話を聞いた。その時に、歴史という話が出て、なんで景観運動がここまで推進したのかと。水清き金山、道政策、公園政策とか様々出ていた。

当時の町長である岸栄三町長さんは、昭和30年代は新生児の死亡率が高いと。当時の岸町長が、その原因を探るために先進国であるヨーロッパに視察を行った。そうする

と、非常にきれいな街並みがあって、それを持ち帰って調べて、水清き政策のためにインフラ整備をした。そして、私が来た当時は道政策、公園政策等、そういう形の中に遠景、近景の中で山並みを途絶えさせないような家並みを作っていたころとしていた。そういうことに着目して、金山住宅の形だとか、そういうものを今、現在の形で、整えてきたと。

私の住宅は全て金山杉で家を建てました。土台だけは、重いものを乗せないといけなないので、町内設計士の阿部さんが、唐松を使用し、建具も180mm、210mmの1枚のガラス戸、ペアガラスですが、1枚が200キロぐらいあります。これだけは大工さんが、つぶれちゃいけないから米松を使おうと。すべて金山杉で、吹き抜けの大屋根天井で建てました。建てて30年近くなりますが、非常に香りも良く、空気も穏やかで、夏は涼しく、冬は暖かく住んでいる。大空間ですので、非常に良い生活を営んでいる。移住して良かったなど実感を持って生活している。

現在は、森林組合で働いており、カバンの中に金山杉を入れて、沖縄県の宮古島まで、金山の大工さんを連れて7棟建てに行きました。全国にも木の家作りネットワークの形を作りながら今は金山杉住宅をつくる会という会を作って活動しています。金山に来てもらって、飲み食いして、契約をして帰って頂く。そういう、金山の良さを伝えて、自分の家で楽しく過ごしている。もし、内覧希望がありましたら、是非、伝えてください。

テーマ②「あなたが住みたい、建てたい住宅とは？」

<岸先生>

続いてのテーマを伺いつつ、前のテーマを混ぜながら、お話をお聞きしたいと思う。女性の方も参加されてますので、お話をお聞きしたいと思う。

<福原由美>

「食の力コーポレーション」で明安小学校をお借りしている福原です。昨年12月から本格的に金山町で居を構え、街なか住宅に入居している。私は出身が横浜市で20年くらい前に結婚し、13年前ぐらいに主人の実家である新庄市に引っ越し移住してきた。

新庄市は特に新庄祭りがメインとなり、新庄祭りが主にあって、みんなそこに向かっていて、本当にそこでみんなが繋がっている社会だなというのが外側から来た人間として思った。新庄市にいるときは福原鮮魚店で鮮魚店を営んでいて、仕出し部門でご葬儀のご注文をいただいて配達で最上管内市町村に配達を行ったりしましたが、私が一番びっくりしたのは金山町の火葬場がものすごく綺麗で、ここは本当に火葬場なのかと思うくらいでした。町に入れば景観条例の看板が掲示されていて、街並みもものすごく綺麗で、興味を持った。外から来た人間だとものすごく綺麗だなとか、役場の通りに行けば、そこもまた綺麗で、なんていいところなんだろうと、本当に外から来た人間は思っていて、もちろん観光資源にもなると思う。シェーネスハイムも昔はJRと提携していて、地元の関

東に住んでた時も山形県にそういうホテルがある事は知っていたので、縁があってこっちに来た時に、あのシェーネスハイムだなと思った。歴史とかはあまり分かっていないが、秋田に抜ける街道沿いで、旗が掲げてあるとか、役場通りの昔の宿場町という感じも残されててすごい素敵だなと思っている。

いざ本当に住んでみて、今までずっと同居してたので、台所一つに女が二人いる感じで、自分一人の台所もなかった感じでしたが、居を構えたことで自分一人の台所も持て、ワンフロアの平屋なので、ワンフロアで生活できる。今までは3階建てで、上下の動きがあったんですけど、平屋の特徴というかワンフロアですごく生活がしやすいと実感する。

また、今後こうなったらいいなと思ったのが、住んでる方がご高齢になってきてるので、玄関の入り口がちょっとした段差でも引っかかるとか、デイサービスが訪問している時もあったりしていたので、そのような感じがした。階段を車椅子で降りるとき、すごく難儀しているところを通勤途中で見たりすると、平屋であっても入り口のところはスロープをつけたり、そういうことも今後検討していけたらより一層、どの世代でも暮らしやすく、そんな感じで進化していけるのではないかと思った。ただ、住宅については、金山杉を使って、高機密住宅で大満足です。

<阿部利広>

設計した阿部です。住んでいただきありがとうございます。

確かに平屋建てはすごく魅力的で、平屋に特化した住宅メーカーもあるくらいで、少し流行っていますが、実際に作ろうと思うと、あまり言いたくないですが、お値段的には結構不利です。同じ屋根と基礎を使ってできる空間がたったワンフロアしか作れないので。同じ屋根と基礎を使って総二階にすれば面積が倍になりますが、それでも魅力があるんだなと思います。

段差の話もあり、バリアフリー化については、いろんところで取り組んでいると思う。ただなかなか金山でいうと、すんなり段差を解消できる玄関ができるだろうかということも少し考えている。ですので、もっと地道にコツコツと続けていきたいと思うので、ぜひ金山住宅にご声援をいただきたいと思う。

<岸先生>

平屋に住むのが最高の贅沢だという方が結構多かったです。ただ、今おっしゃったように、基礎面積に対して、屋内の床面積が不利にはなるという話もありましたが、一方で建築家たちが意外と面白いなと思うのが、建築家が巨匠になると、コンパクトな家を作って、自分の家にしがたったりする人もいたりする。大きければいいというものでもどうやらない。コンパクトで小さく住むためには、当然ですが、持ち物を減らす必要がある。むしろ家の中に籠っていろんなことができるということよりは、活発に活動的に外に出て、それこそ街に出ていくということですかね。街づかいをしていくよ

うな。つまり街も自分の家の一部であるかのように上手に使っていくと、コンパクトな家の中でも十分生活できるという考え方もあるんじゃないかと話す建築家もいる。

私も学生時代に建築の勉強で、火葬場や金山中学校の設計をされた益子先生の授業で、どんな家に住みたいかを学生に聞いていた。そのときは大学1年生で全然知識もなく、大きい家とか、小さい家とか、高いところにある家とか、いろんな素朴なことを言っただけで、先生から、なるほどということでも面白い回答をいただいたのを覚えている。そんなことでいいと思う。ここで今日難しい話をするよりは、眺めがいいとか、空気がよく通る家がいいとか、そういうところにもしかしたら、金山で暮らしている皆さんから、いろんなヒントが出てくると思う。

<中野素子>

私は大阪出身で、まだ移住はしていませんが、皆さんご存知か分かりませんが中田地区にみれい荘というのがありまして、ロフト付きのワンフロアで天井が高く、明るくて木造のお家。薪ストーブを初めて体験してみたいなと思って、町の空き家バンクサイトにみれい荘の売買情報が掲載されていて、ここに絶対住みたいと思った。賃貸としては出ていなかったが、役場の方にご相談して、借りられることになって、5月に引っ越したのでまもなく1年になりますが、ものすごく気に入っていて、ずっと住みたいと思っている。

冬に薪ストーブを焚いて温かくすると、室温が25度よりも高く、湿度が40%下がる時が多い。エアコンだとすごく乾燥して、心地よくない感じになると思うのに、なぜか心地がいい。家中が温かい感じがして、洗濯物もよく乾く。夏は少し残念ながら天井の関係でもあると思いますが、屋根の下がそのまま居住空間で、天井の間にワンクッションないので結構暑い。だけどメリットとしては、すごく天井が高くて気分がいいというところであったりもする。

あとはせっかく山形に行くから、山形の市街地に住むよりも、田舎暮を感じて、味わいたいというのがあった。田舎が失礼なのか分かりませんが、私はいい意味で使わせていただきたい。近くに人の気配がなく、鳥とか風とか自然を味わえるぐらいのスペースがあるというのが、すごく良くて、景色として、湖があるとか川が見えるとかないですが、山に雪が積もったらすごく綺麗だし、春になると鳥が鳴くとか。だからすごくいいところに住ませていただいていると思っている。街並みの話でもないですが、本当に外の人間からすると金山の街が、周りの他の街と比べても、美的センスや、なんかすごくおしゃれな感じで、綺麗だなと思う。

<岸先生>

外からの目で、まさに色々気づかれてる方がいらっしゃる。そのいい意味で田舎という風に、おっしゃっていただいて、若い方が参加していますが、そこで生まれ育ったという、田舎暮らしというものが、自分で選んだというよりは、もともと生まれたところが

そうだったという方から見て、今のお話をお伺いして、金山暮らしはこうだみたいなことはありますか？

<栗田真吾>

中学、高校生ぐらいの時だと、失礼になりますが、なにも遊ぶ場所が無いとっていて、都会の方に住みたいなとっていたが、いざ、30代中盤になって、住んでいると、何というか、自分の中で住みやすいと思うようになった。確かに遊ぶ場所がないと言っても、人との繋がりや、いろんな知り合いが増えたりして、それがまた今となってはいい経験で、普通に暮らしやすく楽しいなと今は感じている。

<岸先生>

ここで生まれて育った方が、移住を考えている方や、あるいは考えたことがないんだけど、そういう気にさせるような、そういう形で金山はこうゆう場所だと上手に教えてくださるような、しかもそれが教科書の勉強みたいな形でもなく、皆さんが持っている経験の知恵、あとは経験上持っている文化の秘密みたいなものがあるような、そういう仕組みがないかなと今のお話を聞いて感じた。

テーマの「あなたが住みたい、建てたい住宅とは？」は、すごい深いと思う。なぜ深いと言うと、建築を勉強してきて、今は街並み作りや、これは金山だけではなくて、いろんなところで人と家や、あと人と街は、どんな関係を持っているのかというのを調べて研究しています。そのときに、大きく変わった時代の中に日本があって、これからどこに行くのか見えなくなっている部分の一つあると思うのが、住宅が買うものになってきた時代であると思います。

本来は、住宅は住むために建てるものだと思うが、今は買えるような時代になった。典型的なのがハウスメーカーでもありますし、例として、北海道の道東地区では、そこで住宅展示場を作り、そのまま売る。商品カタログのような住宅地をハウスメーカーが約10~15社ぐらい集まって1区画を作る。そこに皆さん見学会に行き契約して、自分で土地をお持ちの方はその土地に作ってもらうこともあるそうですが、既存で建てられた住宅をそのまま買います。なので、建てるというよりも買う感覚です。北海道の方々の感覚といえばそうなのかもしれないが、それが何十年にもずっと続いている。例えばこの十勝、帯広に行くと郊外は、この20~30年ぐらいの住宅モデルカタログのようで、住宅のトレンドの変遷が全部見れるような、すごい街だなと思ったりしますが、当然、街並みの統一感みたいなものがそこには期待できない。ある意味では時代の一つ。けれども、住宅とは本当は建てるものだというのは、今もう少し考える時代に来ているのかもしれない。その建てるためには材料はどこから来ているのか、誰が実際そこで作っているのかということを考える。建築家をやられていて、途中から建築人類学を専攻した先生がおり、その方があるとき建築学会でお話されていたのが「もともと住宅というものは、個人のものですらなかった。もともとに立ち返ると。今はそれを通り越して、さら

に自分だけで買うみたいになっている。個人で建てるどころの話ではなく、地域で建てるもの。みんながお手伝いをするとか。そこに関係している大工さんが関わるとか。だんだん建ち上がってくると、地域の人、みんなが喜んで、住宅が完成するとみんなでお祝いする。そういう意味で、子どもが一人生まれるのと同じように、住宅が建つというのが、地域の喜びだった時代だった。」とお話していた。建築家たちがたくさん読んでいる雑誌で、それを人々から取り上げたのは、いわゆる現代の建築家だという話をしたりする。すこし極端ではありますが、住宅とはもともそういうものであったというお話と感じます。

それが社会の中での家の在り方という話をされておりますが、金山の場合は、山があり、杉があり、それを作られる方もいる、技術もあるという中で、もう少し住宅が、皆さんの喜びであるような、自分だけでないなという時代に、戻っていける条件が揃っている場所なのかなと私は思う。そういう意味では非常に恵まれている環境だなと思う。ただ一方では、若い男性の方もたくさんいますけども、そういうところじゃないかと。建てるというか、セルフビルドで自分で建てちゃうという方もいらっしゃると思う。

<佐藤雄太>

景観について、沼澤議員も申し上げられた通り、景観というのは、街の景色や住宅だったりすると思うが、特に今回のテーマは住宅という形で、金山住宅の話をさせていただきたいと思う。

今ここにいる若い方は、今の金山町とは何ですか?と聞かれると、おそらくほとんどの方が、自然に「景観」と答えると思う。食べものが美味しいと答える方もいるかもしれないが、ほとんどは景観と答えると思います。景観意識自体は、ここで育った方々は、意識はあると思う。先ほど、「自分ごと」という話もあり、思うところとして、実際、今の若い人たちも、景観についてはそういう気持ちはあると思うが、自分ごとにならないというよりは、なれないような状況にあると思います。それはなぜかと言うと、まず住宅を建てるにあたって、お金の問題もありますし、あとは環境。環境というのは、世代構成、三世帯住居が少なくなっていたり、もちろんしている世帯もあると思いますが、あとはその場所や土地もないというのがあります。あとはチャンスですね。例えば、今はあるんでしょうけど、将来的に建てる大工さんがいなくなる不安や、そういったいろんな問題があって、なかなかそういった景観の中で住宅というのが一番重要な要素を占めると思う。

私は多様性という言葉が嫌いで、あまり好きではないですが、例えばですが、今の金山住宅を進めていくにあたって、私も以前、景観の仕事をしてるときに、若い施主さんが建てた金山住宅を見て、外観は金山住宅で、内装については既製品のものだったりもしますが、そういったところで建ててくれた方がおりまして、すごく、今のこれからの住宅で、金山住宅を残していくには、そういった住宅も選択肢の一つなのかなというような気持ちを持ったところでもありました。今後、少し難しいかなと思うんですけど、

金山住宅として、町の景観として落としていくためには、どういった金山住宅を建てないといけないのかというのを、しっかり町側も考えなきゃいけないですし、大工さんも考えないといけないと思う。というのが私の考えです。

皆さんに聞きたいのが「あなたが住みたい、建てたい住宅とは？」というテーマの前に、参加者に若い方がいるので、現状で金山住宅のイメージというか、自分が施主や建主になった時に、金山住宅はどういうイメージなのか、建てるか建てないかもそうなんですけど、どういうイメージなのかというのを知りたくて、良いイメージ、悪いイメージもあれば、次の住みたい、建てたい住宅というところにつなげて、どういうふうにやったらいいのだろうというのが出てくるのかなと思ったので、そこを皆さんに聞きたい。

<阿部辰紀>

景観フォーラムに始めて参加して、いろいろ皆様方のお話を聞いてとても大変為になるようなことと感じます。

私も街なか町営住宅に住んでいて、金山町に住んでみての感想としましては、生まれ育った町なので、当たり前のように感じていること、それこそ景観とか、街並みの風景、あとは、先ほどハード面、ソフト面のお話がありましたが、ソフト面でもやはり人間の関係ですね。金山町の人たちがすごい温かい人が多いということも、非常に私が住んで感じる。実際私も一度、都会といいますか、そちらの方に住んでみて、やはり都会の喧騒にやられて、非常に住みにくいなと感じて、やはり結局地元の金山町に戻ってきて、やはり切っても切れない関係なのかなと思いました。

先ほどの佐藤さんの質問とは異なりますが、先日、秋田県由利本荘市にあります、「木のおもちゃ館」に子供と行きました。私も外側の人間から、風景や建物の中を見ての感想としてすごく感じたのは、景観と建物というのは、それこそ分校を子供たちが遊べる施設だったりとか、飲食店とか、展示施設だったりとか、あと景観的にも、グラウンドの脇に線路が通ってあったりとかで非常に素晴らしなと感じた。建物もノスタルジックといいますか、深き重みがあって、中の内装もステンドグラスだったり、由利本荘市の方の地域性が見られたなど。スタッフさんはお母さん方ということで、経営者が由利本荘市の市役所で主体となっているというお話も聞いた。今後の金山にも何かそういったところに活かせられたらなと思いますので、ぜひ、先生からも役場の方にご指導をお願いします。

<岸先生>

「木のおもちゃ館」は、とても雰囲気がいい。木造の分校で、山の麓にあり、表が開けた感じで、とても居心地のいい場所なので皆さん、ぜひ一度、行ってみたい。

<渡部雅人>

私も街なか町営住宅に住んでいて、あの建物が金山住宅というイメージが強いところでもある。「あなたが建てたい、住みたい住宅とは？」というところで、現状家を借りて住んでいる状況でもありますので、やはり持ち家を持つことは、一つの憧れではある。ただ先ほど空き家という話もあり、私も子供を育てている身としても将来的に家を建てたとしても、子供が県外に出ていって、自分たちも将来的に亡くなって、結局一つ憧れを持って建てた家が、急廃して空き家になっていくところまで考えると、その時はとても憧れを持って家を建てるという目標を成し遂げることが、将来的に町としても不経済に繋がっていくのではという考えも持っています。

<岸先生>

本当に現実的な問題として捉えていただいている。世代を超えて同じ家に住み続けるという保証はない。いろんな選択肢がある時代なので、私も横浜市から秋田市に引っ越してき時に、空き家となって20年ぐらいの住宅を購入した。本当にボロボロで、手をかけたら大変だぞという話でしたので、土地代だけでいいということで、ほとんど建物をタダ当然でいただいて、それを直しながら暮らしている。ただリフォームしながらお金をかけていきながら、子どもたちがまだ小さく、次の代でこれをどうするのかなど。自分はクラシックカーをいじるみたいにして楽しんでいじって直して、お金も当然そこにかけているんですが。本当にそれだけのお金をかける価値があるというよりも、その分子どもの教育費に回すとか、すごく悩ましいことです。けども自分の中での判断は、住むことを置き去りにして、住むことの質を置き去りにして、じゃあ教育費の投資だとか、それは少し飛びすぎだなどの感じもしなくもないですし、多分一種の賭けと思う。次の代はどうするみたいな不安はいつも、私の中でも抱えながら暮らしているというのは実際にはある。そこで、もしかすると新しい仕組みが必要なのかもしれない。あるいは我々自身の感覚も、次の代がないのであれば、赤の他人、家族ではない誰かに手渡していく仕組みとか。賃貸を上手に運用する仕組みとか。何か我々の中での決断とか、発想の転換みたいなものも必要なのかもしれない。そうしないと本当に建てるのが怖くて、住宅は建てられないですね。

<庄司大寛>

私の住宅は金山住宅ではないが、街並みづくり100年運動が始まる前に建った古い家で、店舗兼住宅みたいな住宅に住んでいる。祖父が大工で、今の家を建てたので正直少し愛着がある。私も子育て世帯で、家のことも考えてはいますが、金山住宅となるとイメージ的に大きいとすごく思う。先ほどお話しがあった、平屋とか少しコンパクトな家とか、みれい荘ぐらいのコンパクトな住宅にすごく興味があっていいなとは思っているので、そういったコンパクトな金山住宅が広まって、モデル的な部分があるといいなとは正直思う。

今までずっと話をされてきて、景観 100 年運動は、建築のイメージがすごく強く、個人的に私も建築のイメージがすごく強くて、私は観光業をしているので、お客様にもこういった話をして、金山は綺麗だよとか、建築でこういうところで頑張っていると言うと、どうしても建築の方向に行ってしまうのですが、この 40 年間で、正直そういった部分が皆さん先生方とか、頑張ってきてもらっちゃって、金山住宅は本当にもう極まってきたというか、ハード面は頑張ってきたと思うので、これからは少しソフト面な部分で広めるように頑張っていた方が個人的にはいいかなとも思う。そういった時に金山住宅が建築される時に、どうしても奥さんと家の人が話しをすると、やっぱり女性の意見がかなり大きいですし、自分の一存で全部が決められませんので、そうすると女性の方の意見がすごく重要になってくると思う。そういったところも、ただ若くてというよりは、本当にキッチン周りや内装も含めて、金山住宅がこれだというこだわりじゃなくて、使いやすい今の時代にあったデザインとか、そういうところも是非、モデルを示してもらった方が、個人的には建てるとなると、すごく興味が増すと思う。

<岸先生>

金山住宅はどうしても大きいイメージがあると思う。コンパクトな住宅も増えていて、住宅を建てる判断材料や、きっかけになればいいと思う。

○総括

<阿部実行委員長>

今日は忙しい中、貴重なご意見いただきありがとうございます。私たちが思っている以上に皆さんの心の中に景観が浸透していて、すごくほっとした部分もあるのと、やっぱりこれから、庄司さんがお話した、建物だけが景観ということではないんですが、渡部さんが言ったように、建てた後、自分たちがいなくなった後も、残っていくような建物を建てながら、作りながら、街を維持していく仕組み、そういうものも考えていかなければならないなとすごく思ったところです。

<佐藤町長>

様々な貴重なご意見をお聞かせいただきありがとうございます。金山の景観ということで、先ほども、綺麗だというお話も随所にさせていただきましたが、私も来客の方が見えたときに、金山の話というと、やはり「街並みが綺麗ですね」というところから始まります。

これまで 40 年間培ってきたものというのは、本当に有形無形というか、すごい形で財産として今残っているということを実感している。それらを、今後このいい景観をどのようにして維持、発展させていくかといったときに、やはり鍵となるのは、若い世代の方々の考え方だというふうに思いましたので、若い方々からご参加をいただいて、様々なご意見を聞かせていただいたというのは、ありがたいなと思ったところです。

事前のアンケートでは金山住宅を建てたい、建てたくないとの意見もあり、建てたくても現実的にお金の等面で心配だというご意見もありました。本当にそれは今後、金山住宅をコンパクト化、あるいは平屋とか、そういったところで経費的なところも若干抑えながら、併せて、金山住宅の良さを伝えていきながら、建ててもらおうということも、ぜひ選択をしていただけるような内容の提案や、そういったことも必要なのかなと少し感じたりしました。時代的にも、これまで金山住宅はどちらかという大きいイメージだと思いますので、それに家族構成も、三世帯とか、あるいは二世帯もなかなかいなくなったとかという形もあるかと思います。その中で、施主の方が建てるといったときに、ハウスメーカーの営業力も確かにあると思います。その中で、金山住宅の良さをもうちょっと側面的にアピールして、金山住宅を金山で建てて、そしてこれからも住んでいくというようなところに持っていけるようなところを、推し進めればなというふう感じたところです。

これまで培ってきた40年のこの素晴らしい取り組みを、これからもいい形で今後も続けていきたいと思っておりますので、お聞かせていただいたご意見なども参考にさせていただきながら、また景観運動を進めていきたいというふうに思います。今日は本当にありがとうございました。

文責：柴田